

眼の手術の臨場感、小説書きは賭けという見方。

見 る

内海隆一郎

一年ほど前、散歩中に、前方の空中を走る電話線が不自然に波打っていることに気づいた。驚いて周囲を見まわすと、建物の輪郭や窓枠など、本来は直線でなければならぬものが、くねくね曲がっている。

そのときは疲れ目だろうと思ったが、数日後、置き時計の文字盤が妙に滲んで見えるようになった。右目は正常だが、左目の視力が急激に落ちているようだ。

眼鏡店で視力を測ってもらおうと、レンズでは矯正できないと言われ、眼科医院で精密検査を受けたところ、**〔左眼黄斑部網膜中膜形成症〕**と診断された。

誰でも年齢を重ねるとともに眼球内の硝子体が収縮する。その過程で全体を包んでいる薄膜の一部が網膜の表面に取り残され、勝手に増殖して広がることもある。これを手術して剥がさないと、さらに視野の歪みと視力低下が進行するという。

・・・

翌日、私は不安を懐いたまま手術台上に上がった。手術に要する時間は三十分でいどで、痛みもないと言われていたので、その点では緊張することはなかった。

左目の瞼が固定され、ひらいたままの状態になっている。右目は布におおわれ、何も見えない。やがて左目尻に麻酔注射が打たれ、しばらくして、じゃ、はじめますよ、と教授の声が頭上から聞こえてきた。

強い光線が当てられると、左目のなかに、こつ然と青く澄んだ宇宙があらわれた。直径十センチぐらいの円形の画面が、ぽっかりと前方に浮かんでいるといった感じだ。そのなかへ洗浄のための水が流れてくる。まぶしさも痛みもまったくない。

いつのまにかメスが入っていたらしく、青い画面に細長い影が忍び込んできた。その先端が、何かを引っ掻くように細かく動く。まわりにミジンコのような微細な泡が蠢いている。まもなく先端が何かを捉え、その動きにつれて半透明の薄い膜がめくれ上がった。細長い影が引っ込み、ピンセットらしきものが入ってきて、ゼリー状の薄膜の端をつまんで、するすると剥いだ。

そのとき私は初めて、宙に浮かんでいる青い画面が網膜であることに気づいた。それまで見えていたものは、すべて網膜そのものに映った像だったのだ。

思わず吐息が洩れた。それを聞きつけたのか、頭上から教授が告げた。

「いま膜を取り除きましたよ」

「見ていました。面白かったですよ」

そう応えると、また教授が言った。

「ほう、見えませんか。……あとは縫うだけだから、もうちょっとの辛抱です」

まもなく鉋(はさみ)で糸を切る音がかすかに伝わってきた。あとで聞いたところによると、**メスは虹彩の脇から硝子体のなかに入り、網膜の黄斑部へ達したらしい。**

こだわる

夏木静子

ところが、もう八年前になる九三年一月のある朝、私は突然椅子に掛けられないという奇っ怪な症状に襲われた。続いて腰痛が発生し、しだいにひどくなるが、どんな鎮痛剤も効かない。加えて恐ろしいほどの全身倦怠に見舞われ、まるで鉄の甲羅を背負わされているように感じた。

大学病院の整形外科、内科、婦人科、神経内科……と、つぎつぎ検査を受けたが、何も原因が見当らない。そのうち大ぜいの人が多様な民間療法を勧めてくれた。鍼、灸、マッサージ、気功、整体、カイロプラクティック等々、考えられる限りの療法を試みたが、いささかも効果はなかった。症状はひどくなる一方で、私はほとんど終日、ただジッと横になって痛みを耐えているほかない状態になった。

まる三年苦しんだ末、心療内科の先生に出会った。彼は、私の症状は心因性で、私は「心身症」なのだと言った。とても信じられないまま入院したが、二カ月の治療で実に劇的に快癒した。

ではなぜ私に不可解な症状が出現したのか、専門医の分析を自分流に要約すれば――。

人間の心には意識と潜在意識があり、私の意識はもっと仕事をしようとして張り切っていたが、自分では気がつかない潜在意識はもう疲れきって休みたかった。二つがどんどんかけ離れて、ついに潜在意識が、病気になれば休んでもらえると考える幻のような症状をつくり出した。私はそこへ逃げこんで病人になり、仕事をせすにすむようになった。これを「疾病逃避」と呼ぶのだと教えられた。

さてそのあとである。

最初に発生した幻の症状はどく軽度であったはずだという。ところが私の気持がちまちそれにこだわった。さあ大変なことになった。今日はどうだろう？ 治るんだろうか？と、日々症状を点検し、程度を測り、心配していたので、症状はみるみる肥大化した。私が過度にこだわったことが、自分自身をのびきならない重症患者に追いこんでいったというのだった。

従って治療では、まず私の症状へのこだわりを取り除くことに力が注がれた。「痛みと共存しなさい」と先生は説いた。共存すれば、痛みはふつうのことになり、こだわる対象ではなくなって、結果的に消えていくのだと。

それらのカラクリを認め、自分の心因を受け容れた時から、私の回復が始まった。後に私は『椅子がこわい』という闘病記を書いたが、椅子に掛けると最初ちょっと腰が痛かったものを、私がこだわりすぎたために、いよいよ絶対に椅子に掛けられなくなったわけだった。

実は私は「こだわる人間」だったのだ。

賭ける

佐藤正午

で、古いエッセイの中で僕は昔の僕がこう書いているのを発見した。

「その頃の毎日をいま振り返ると、ひょっとしたら小説を書くことじたいが一つの博打ではなかったかと思われて仕方がない。もちろん当時はそんなことは考えていなかったはずだが、しかし二十代も後半にさしかかった男が職にも就かず、恋もせず、友だちにも変人扱いされながら、二年間をただ長編小説を書き上げるためだけに使ったのである。(略) もし書き上げたとしても誰に読んで貰えるあてもない。もし出版社に送ったとしても、新人賞に当たる確率は低い。はずれたらゼロだ。七百枚の原稿はクズになり、七百日の推敲はすべて無駄になるかもしれない。これはやはり博打である。まちがいなく大きな賭けである」

要するにこの文章は、いまの僕に言わせれば、「自分はその大きな賭けに勝ったのだ」という自慢話である。